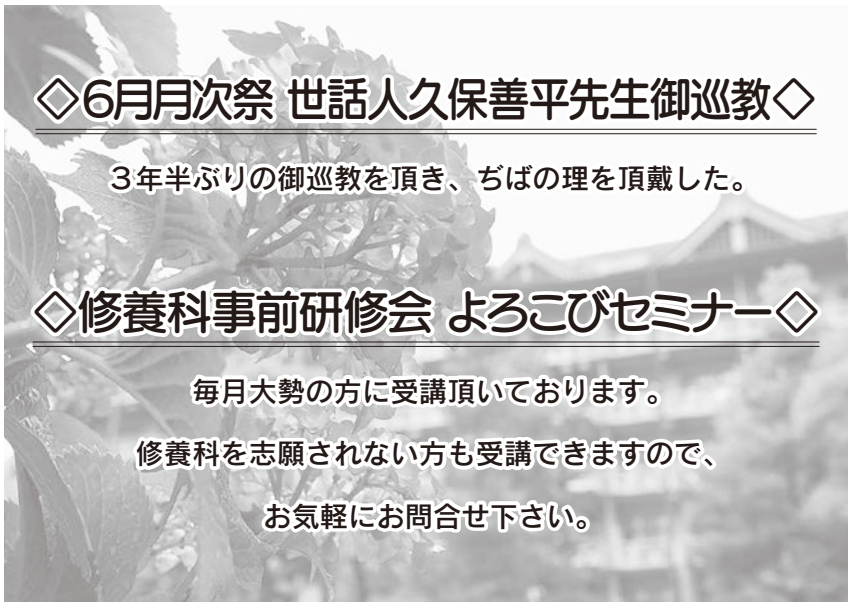
網走月報

立教186年
活動方針

「教祖のひながたを目標（めどう）に
全教会心定めの達成」



大教会のHPがご覧になれます！
月報には掲載されない写真もいっぱいです！
ぜひ一度ご覧下さい♪

発行所
天理教網走大教会
布教部出版広報掛
〒093-0073
網走市北3条西6丁目
TEL 0152-43-2227
FAX 0152-44-2227

大教会六月月次祭

大教会6月の月次祭は、12日午前9時30分から大教会長祭主のもと、執行された。

大教会長は祭文で、親神様の御守護に御礼申し上げた後、「本日は、世話人・久保善平先生の御巡教を賜り、おつとめ奉仕者を先頭に、参拝者一同声高らかにみかぐらうたを唱和し、勇み心を揃え、もらすことなくぢばの理を頂戴し、六月の月次祭を真剣につとめさせて頂きます。また、修養科事前研修会よろこびセミナーを毎月開催させて頂くという大きな御守護を頂戴しておりますこと、厚く御礼申し上げます。更に五月は、初席者一名、教人講習修了者一名の人の御守護を賜りましたことも、重ねて心より御礼申し上げます。」と奏上した。

その後座りづとめ・十二下りのてをどりが勤められ、参拝者は共に勇んでみかぐらうたを唱和した。

神殿講話　世話人 久保善平先生

神殿講話抜粋

◆教祖の年祭とは◆

真柱様は、諭達第四号の冒頭に「教祖百四十年祭を迎えるにあたり、思うところを述べて、全教の心を一つにしたい。」と記して下さいました。

教祖の年祭に向かうにあたって全教、即ちこのお道に繋がる皆の心を一つにしたい、心一つに年祭に向かって歩みを進めたいということでありましょう。ではなぜ教祖の年祭に向かうにあたっては、皆の心を一つにしなければならないのか、ということを考えてみたいと思います。

私は教祖の年祭は我々皆の親の年祭だと考えています。教祖は私たちの親であります。教祖は親神様が人間をお創り下さった時に、母親の役割をつとめられた魂をお持ちのお方であります。そして人間の元の親・実の親であらせられる親神様が入り込まれた、月日のやしろたるお方であります。親神様の子供である私たちが、陽気ぐらしへの道を誤らずにたどることが出来るように、自ら五十年にわたって道を歩んで下さったひながたの親が教祖であり、お姿をお隠しになられてからも、存命のまま私たちを導いて下さっているのです。

教祖の年祭は、人間が故人を偲ぶためにつとめる年祭とは意味合いが異なります。教祖は今もなお、存命でお働き下されています。ですから亡くなられた方、故人を偲ぶのとは明らかに違いがあると言ってもよいでしょう。

私は、教祖の年祭を教祖にお育て頂くお互いが、我が事としてつとめることが大切だと思っています。教祖と私たちとの関係は親と子と言ってもよいでしょう。自分の事をいつも気にかけて下さっている親の年祭なのですから、教祖に一生懸命毎日を過ごして

いる自分の姿を見てもらいたい、成人した姿を見てもらいたい、そして喜んで頂きたい、安心して頂きたい、そうした気持ちでその日まで通らせてもらいたいものであります。皆がこうした心で通ることが大切なのだと、今この時旬における私たちの思案と行動の指針を、諭達を通して教えて下さったと思っているのであります。

◆ひながたの道を通るということ◆

諭達にも引用されておりますが、明治二十二年十一月七日のおさしづの中で「ひながたの道を通らねばひながた要らん。（略）ひながたの道より道が無いで。」とお教え下さっています。教祖のお通り下された五十年のひながたは陽気ぐらしへ向かって歩む手本、親神様の御教えを御教え通りに歩むための手本だということが出来るのではないでしょうか。口で説いただけではなかなかこの道を歩もうとしない私たち人間に、何とかたすかる道を教えようと、身をもって手本の道をお示し下されたのです。

私たちが親神様の御教えを信じ、陽気ぐらしへの道を歩むためには、教祖がお付け下された手本の道、いわゆるひながたの道を通るより他に方法はありません。しかし教祖はご自身と同じように、私たちにも五十年通らねばならんのだとは仰せになっておられないのであります。今引用しました同じおさしづの中で、わずか三年千日ひながた通りの道を通ればよいのだ。そうすれば落ちようと思っても落ちられないようになるんだ、という意味のことをお示し下さっているのであります。細い道を通るからこそ、大きな道に出ることが出来るんだということを心に治め、三年千日私たちが一手一つに通ることが大切なのであります。

ひながたの道を三年間たどり続けることは容易なことではないかもしれません。しかしこれまで通って来て下さった先人がおられるわけですから、私たちにも出来ないことはないのであります。この時旬にひながたの道をしっかりたどらせてもらえば、先々必ず結構にお導き下さるということを信じて、勇気を持って根気よく歩ませて頂きたいのであります。

この道は教祖お一人から始まりました。親神様のご存在も、その御教えも、世の中の誰一人として知らないところから、教祖はこの道をお付け下さったのであります。すべては子供である私たちをたすけたい、子供可愛い一条の親心からであります。教祖がお現されなければ今の私たちはありません。又、教祖におたすけ頂いた先人先輩たちが教祖を慕い、ひながたを手本としてこの道を歩んで下さったからこそ、今があるのです。こうしたことを決して忘れることのないように、教祖の親心と御恩に思いを馳せて、私たち一人ひとりが教祖のひながたを、これが私の通る道なんだと心に治め直して歩むということが大切だと思えてなりません。

真柱様は立教百六十二年の秋季大祭で「ひながたの道は、私たち道を通る者のためにあるのであります。とかく、形の面だけに目を奪われますが、ひながたの奥にある、一れつ子供救けたい親心をしっかりと見つめ、そして自分自身に、いささかなりと教祖のお心を体して通っているだろうかと、折に触れて問い返して頂きたいのであります。」とお話を下さったことがあります。

たとえ時代が変わっても、教祖が教えて下さった親神様の御教えは、決して変わることがありません。変わることのない教え、そして教祖の親心、これをお通り下されたひながたの道に求め、今を生きる自分の思案や行動に反映して通っていくということが、ひながたをたどる態度であると思うのであります。

諭達の中では、教祖がまず貧に落ち切るところからひながたの道を始められ、どんな困難な道中も親神様のお心のままに、心明るく通られたことが述べられています。ひながたの道の最初、陽気ぐらしへ歩む手本の道の最初に、貧に落ち切られたという事は何を意味するのでありましょうか。私は陽気ぐらしへの道を真っ直ぐに歩むには、世間の常識ではなく親神様の思召を自分の常識とすることが大切なんだ、だからまず己のこだわり、執着を捨て去ることがその第一歩となるんだということを教えて下さっているように思うのであります。

貧に落ち切るということによって、それまでのものの考え方を捨て去り、どんな中でも喜ぶことが出来る、親神様のお望み下さるものの見方や考え方が身に付きやすい環境を整えることを教えて下さったのではないでしょうか。

次に、水を飲めば水の味がするというお言葉を用いられ、親神様の大いなるご守護に感謝して通ることを教えられていると述べて下さっています。私たちは親神様のご守護が無ければ生きていくことは出来ません。親神様からお借りしているこの身体に下さる様々なお働きは勿論のこと、自然の様々な恵み無しには私たちの命は成り立たないのであります。こうした親神様のお働きやお恵みは、私たちが欲しい時だけに下さるのではないのです。少しの絶え間も無く頂戴することが出来る、又、必要な時に必要なものを頂戴することが出来る、そうした

親神様の大きな大きなご守護のお陰で、私たちの毎日はあるのです。

そして諭達では次に、ふしから芽が出る、というお言葉を用いられています。成ってくる姿はすべて人々を成人へとお導き下さる親神様のお計らいであると述べられているのです。明治二十年、教祖がお姿を隠されるという大きなふしには、当時の人々の心の成人を急き込まれるという思召があったとお聞かせ頂きます。当時の人たちは、おさしづを伺い、そして談じ合い、そうした思召に気が付いたからこそ、その後、道が大きく伸びるというご守護を頂戴なされたのではないでしょうか。

私たちはよく、成ってくるのが天の理と聞かせて頂きます。また、見るもいんねん、聞くもいんねんとも聞かせて頂きます。親神様は私たちを成人させるために、必要なことを、毎日の嬉しいこと、悲しいこと、苦しいことなど、様々な形でお見せ下さるんだと思うんです。親神様が私たちのために、自分に向けて見せて下さっていることでありますから、目を背けることなくしっかりと向き合って、そこに込められた親心を探し求めて、喜ぶことができるよう、前を向くことができるよう、思案して通ることが大切だと悟らせてもらうのであります。

ふしから芽が出ることもあれば、ふしで折れてしまうこともあります。ふしから芽が出るご守護を頂戴するためには、成ってくることには、すべて親神様の親心が込められているんだと、素直に受け止めて通ることが大切だと、ひながたを通して教えて下さっていると思うのであります。そして次には、人救けたら我が身救かる、というお言葉が出てまいります。この教えを信じるお互いは、親神様、教祖の世界中の人間をたすけたいとの思召、たすけ一条のお働きの手足となってつとめさせて頂く役目をお与え頂いているのだと思います。

しかし、思い違いをしてはいけないのは、たすけて下さるのはどこまでも、親神様、教祖であって、私たちがたすけるのではないということであります。私たちのなすべきことは、身上や事情で悩み苦しむ人を何とかたすけて頂きたいと、親神様、教祖に願うことであります。

又、相手の方に親神様、教祖のお話を伝えることであります。そして、何とかご守護を頂くために、不思議なお働きを頂戴するために真実を尽くしていくということであります。

私たち人間は決して、親神様、教祖と横並びの、たすける側にはなれません。どこまでも、たすけて下さるのは神様であります。人間はたすけられる側だと思います。ただ、そのたすけられる側の人間の中で、人より先に、親神様、教祖のお話を聞かせて頂いて、たすけ一条のお手伝いをさせて頂くことが出来るのが私たちなのであります。

人救けたら我が身救かる、このお言葉は、私たちの役割は人様をたすけさせて頂くことだと教えて下さっているのと同時に、たすかりたいと思ったら、人様をたすけさせてもらいなさい、この教えを実行しなさい、そうしたら成るように成っていきますよ、と教えて下さっている気がしてなりません。

自分がたすかりたいからこそ教えに素直になるんだ、たすけてもらいたいからこそ人様にたすかってもらうようにつとめさせてもらうんだ。そこから始めさせてもらえればいいのではないかと考えているのであります。

水を飲めば水の味がする、ふしから芽が出る、人救けたら我が身救かる。こうしたお言葉を通して、親神様のご守護をご守護と感じて、毎日を過ごす。毎日出会うことには、すべて親神様の親心が込められている。御教えを素直に実行することで不思議なお働きを頂戴することが出来る、ということを学ばせてもらえると思っています。

親神様のお働きを頂戴してこその私たちの毎日なのですから、その毎日に成ってくることをしっかりと受け止めて、そこに込めて下さる親心を思案して、教えを教え通りに素直に通ることが大切なのだということを、五十年のひながたを通して教えて下さっていると思うのです。

◆御用をつとめる◆

私は本部で御用をつとめさせて頂いているのでありますが、教会でも教会長という立場でつとめさせて頂いているのであります。両方の立場がありますが、身体はご覧のように一つしかありませんので、それぞれを十分につとめているとはとても言えません。どちらに対しても、申し訳ないなあと思うことが多々ございます。

そんな中でよく思いますことは、おぢばの御用をちゃんとつとめることが教会の御用に繋がり、また、教会の御用を一生懸命つとめることが、おぢばの御用にも活きてくるということであります。

教会の会長としては教会の御用を手伝ってくれる人、教会に足を運んでくれる人、そうした人が一人でも増えたらありがたいなということをいつも思っています。そのために、しっかりと丹精しないといけない、にをいがけしないといけないとも思うのですが、なかなか思うように時間が取れません。

私は、教会に足を運ぶ、教会の御用をつとめてくれる、そうした人をお与え頂くため

には、まず自分が足を運ばねばならないところに足を運び、そこの御用をちゃんとさせてもらうということが大切だと考えています。そしてそれと共に、出来る限り本部の御用があるから信者さんのことができない、ということを言わなくてもいいように、何とかやりくりをしてつとめているのであります。

この道を通る上で与えられる御用は、親神様、教祖が私のすべてを見極めた上で、下さっているんだと思っています。本部と教会と両方のことをすることが、お前のためだと、御用を与えて下さっているのでありましょう。ですからそこに不足をすることがないように、また、何とか両方が立っていくようにつとめさせて頂きたいなと思っているのです。

◆次代の丹精◆

こうして今の時代を共に通る人を丹精する努力も大切でありますが、次の時代を担う人を丹精する、導くということも忘れてはならないことだと思います。次の時代を担う人は、そのまた次の時代を通る人を育てる人でもあるのです。道は続くからこそ道なのです。途中で途切れれば、道が道でなくなってしまいます。道は通る人があるからこそ、道であり続けられるのだと思います。いくら一時はきれいな道になっていても、人が通らなくなって、誰も手入れをしなくなれば、そこにはいつの間にか草が茂り、荒れ果ててどこが道やら分からなくなってしまいます。

教祖がお付け下されたこの道も、陽気ぐらしに向かって道が道であり続けることができるように、しっかり手入れを続けていくことが必要です。そのためには、自分が通るそのあとに、何とか道を通る人を育て導いていくことが欠かせません。一時は細くなったって、上り下りが激しくなったって、右や左に曲がりくねっていたって、陽気ぐらしという目的地に向かって道を通る人が続いてさえいれば、私は道が道であり続けられると思っています。

陽気ぐらしへ向かうこの道は、一代や二代、百年や二百年では決して目的地に到達することができない道なんだと思います。末代かけて通らねばならない道なのだと思います。教祖がお付け下さったこの道が、陽気ぐらしへ向かうこの道が、目的地に達する前に、途切れてしまうことのないように、次の代、また次の代へと着実に引き継がれていくように、お互い心を合わせてつとめることが大切だと思います。

教祖の教えを、教え通りに繋いでいくということが大事なのでありますから、心の向きに十分注意をして、道を末代へ繋ぐ努力をさせてもらいたいのであります。

◆成人の旬◆

教祖の年祭は成人の旬と教えて頂きます。成人の旬とは、成人出来る時、成人しやすい時といってもいいでしょう。

では、三年千日になれば、何も特別なことをしなくても、今まで通りに過ごさせてもらったら成人出来るのでありましょうか。そうではないということは、お分かり頂けると思います。成人するには、成人するための努力が必要なのです。私たちが成人するための努力とは、年祭への三年千日、しっかりとひながたの道を歩ませてもらう努力をすることであります。誰のためでもありません。自分が成人するための、自分がたすけて頂くための努力であります。

教祖の年祭の元は、子供である私たちの一層の成人を促された、というところにあることに改めて思いを致し、自分が成人の努力をすることが、何より教祖にご安心頂くことになるんだ、お喜び頂くことになるんだということを、我が心に治めさせて頂きましょう。そのためには、三年千日、ひながたをたどるということを意識して、何をさせてもらったらいいのか、今の自分には何ができるのか、ということを考えて、これをさせてもらおう、と心を定めて通ることが大切だと思います。

三年千日、三年千日と口で言いながら、これまでと変わらぬ毎日を通れば、結局は何もしていないのと同じことになってしまいかねません。

成人の旬に、成人させて頂くことができるように、この三年はどうでも通り切らせて頂こうと、普段とは時も心も仕切ってつとめさせて頂きたいと思うのであります。そして通らせて頂く毎日の中で出会う、どんなことに対しても、教祖の教えによれば、こう考えればいいんだ、親神様の思召によれば、こう悟らせてもらったらいいんだ、そういう姿勢、いわゆる神一条の心で毎日を通ることが大切だと思っています。

そうした努力が出来れば、きっと教祖はそうや、そうや、それでいいんやとほほ笑んで下さるに違いがありません。こうした姿勢を身に付けることが出来るように通るということが、ひながたをたどる努力だということではないかと思っているのであります。

教祖のお陰で今日という日があるんだ、教祖の年祭は私たちの親の年祭だ、だから自分の成人した姿を、自分の成人する努力を教祖にご覧頂きたい、そして少しでも喜んで頂きたい、安心して頂きたい。そうした同じような心を持って、教祖百四十年祭に向かっての歩みを進めさせて頂きたいのであります。そのことが将来のこの道の伸展となり、そして何より、陽気ぐらしに向かっての着実な一歩に繋がっていくのだと信じてやみません。

修養科事前研修会 よろこびセミナーを受講して

誠綱　鈴木保子
（修養科未定）

研修会に来させて頂いて本当に良かったです。天理教の教えがよく分かったし、先生方もとても丁寧で分かりやすかったです。知らない先生とも親しくなり、おぢば帰りして詰所でお会いした時には、又、声をかけて下さい。有難うございました。

誠綱　中島義博
（修養科未定）

先生方が分かりやすく伝えるようにと工夫して勉強されていて、研修会を受ける側の立場に立っておられると感じました。先生方の熱意が伝わり、真剣に伝えてくれていたので、こちらも引き込まれてしまいました。

いろいろなことを自分の身に置き換えてイメージすることができました。

大教会と距離が近くなったと感じました。

誠綱　加藤敏明
（修養科未定）

改めて、聞いてはいても、深く、意味、意図を汲み取っていなかったことを感じました。深く反省をすることがあり、もう一度読んだこと、聞いたことには素直に心を傾けるように自分でも自然な気持ちを持ちたいものです。先入観とか固定観念で捉えることが多い中で、気持ちを柔軟に持つべきかと自分で反省致しました。自分を誇示せず、謙虚でありたいと気付き、良かったです。

誠綱　加藤悦里
（修養科未定）

何故自分がこの「よろこびセミナー」に参加したのか、その必要を知らせて頂いたと思います。

人と知り合うこと、交じり合うことで、自分を見つめ直す時間を頂きました。得手なことと、不得手なことを、より分からせてもらい、自分をどう生かさせてもらえるか。そのために今、できることをさせて頂く、さらには、もう少し欲張りになって、幸せになることを願いたいとも思いました。

男女交えて、年代も異なった中で、皆さんの考えや、意見を聞ける時間、ねりあいが多くあったことが、よかったです。大教会長様が開講ご挨拶の中で、何故、大教会に足を運ぶのかをご説明下さって、初めてその理を知り得ました。そこをもっと打ち出して頂けると、もっと時間を自分のために差し出すことが出来ると思いました。

この度は夫婦で参加できたことを夫に感謝したいです。

網走学生会

6月18日（日）、網走学生会と北海道教区学生会が合同で、おぢばに在学する道内の学生と繋がりを持とうということを目的に新入生歓迎会と懇親会を行った。

お茶所前に集合し、神殿近くの公園の除草ひのきしんをさせて頂き、その後、網走詰所でバーベキューをし、お腹いっぱいお肉を食べた後、水風船で遊んだりした。

▼参加者9名・スタッフ6名

立教186年 人のご守護 心定め

初席者	ようぼく	修養科修了者	教　人
69名	44名	34名	21名
成　果（6月末現在）			
15名	3名	3名	1名

動静

◎出直

▼直轄ようぼく・遠田舜次様は6月12日出直された。享年90歳。

▼直轄ようぼく・木田貞雄様は6月15日出直された。享年94歳。葬儀は斜里町の自宅にて6月17日みたまうつしが大教会長斎主にて、翌18日告別式が大教会長夫人斎主にて執行された。

◎年祭

▼陽光分教会所属・倉光忠行様の十年祭が6月24日自宅にて桐谷善広陽光分教会長祭主のもと執行された。

▼陽光分教会所属・原大治郎様の二十年祭・原泰子様の五年祭が6月25日自宅にて桐谷善広陽光分教会長祭主のもと執行された。

6月人のご守護

○初席者（2名）

網新　岡本　守
　　岡本圭子

○中席者（6名）

直轄　常盤野里香
誠央　田中滋也
網新　新川愛貴
誠網　木沢巴菜
網次　森　大地
誠網　安田千晴
　　伊藤のぞみ
　　佐藤奈々
　　宮下和子

○修養科修了者（3名）

○教人資格検定講習受講者〔全期〕（1名）

武士　村井　実

○別席傍聴願（2名）

育英会寄付者

網盛分教会様（前会長葬儀）
木田光恵様（夫葬儀）

大教会6月の動き

1日　役員会会議
2日　大教会長夫妻、教区本部巡回出席
3日　直轄世話人会
4日　縦の伝道日
7日　お話し会
9日　網走支部例会会場
10日　役員会会議
11日　世話人先生ご到着。育成部部会。教祖140年祭網走おたすけ委員会会議
12日　月次祭。世話人先生ご巡教。役員会会議。連絡会
13日　教会長夫妻練り合い。修養科事前研修会よろこびセミナー（15日まで）
17日　会長、木田貞雄様みたまうつし斎主つとめる
18日　会長、札幌信者まわり（21日まで）。縦の伝道日
23日　会長、おぢばがえり。詰所23会
24日　会長、本部神殿奉仕つとめる
25日　会長、本部災救隊会議出席。縦の伝道日
26日　本部月次祭遙拝。会長、教区主事会出席。結城和広役員、本部神殿奉仕つとめる
27日　会長、かなめ会出席、一期講師各期講習会講師（28日まで）。細木善信役員、本部神殿奉仕つとめる
30日　みそか会。直轄世話人会。

教祖140年祭

立教186（令和5）年人のご守護成果表（6月末現在）

教会名	初席	中席	ようぼく	修卒	教人	帰参者 当月	帰参者 累計	教会名	初席	中席	ようぼく	修卒	教人	帰参者 当月	帰参者 累計
直轄	3	1				5	40	誠央	1	2				17	27
美幌							1	常道							1
女満別		2				3	20	徳道	1	5				2	27
斜里町							0	満金							3
釧厚							1	網安							1
武士						1	2	オホーツク							11
常呂			1			1	19	網徳							3
旭網	1					3	8	栗沢							5
御料							2	徳元	1	1					8
東藻琴							0	網盛						1	4
陽光							7	網新	3	2				4	17
呼人						2	7	網葉							1
誠陽		1				1	6	網陽							1
網栄							1	誠網	3	11		3	1	3	30
實東						2	21	網次	1	4					9
東網			2				6	網昇	1					1	11
宗稚						1	9	勇走						1	9
								詰所							13

初席 当月	初席 成果	中席 当月	中席 成果	ようぼく 当月	ようぼく 成果	修卒 当月	修卒 成果	教人 当月	教人 成果	帰参者 当月	帰参者 成果
2	15	9	29		3	3	3		1	48	331

6月　月次祭　6/12(月)

〈参拝者数　約80人〉

神殿講話	賛者	指図方	扉者	祭主		
久保先生	田中遠藤三澤奥野清水	丸山一徳	小松結城	大教会長	祭員	祭典役割
胡三味琴弓線	小りがす鼓ね太鼓木ち子ん笛ぽん	地方	てをどり			
藤井栗山崎道恵	細木大山結城桐谷澤田三幣	瀬川藤山久保先定自重善生	三幣栗林大教会長リ輝ツ子夫人丸山一徳新川正人教会長		座りづとめ	
大山澤田藤泰子裕子知子	菅原吉村桐谷青山藤齋田遠藤	田中小針三幣敏繁文志	藤山井村さのとり丸真理遠み子藤小広松栗林徳志正		前半	
三幣新川千有子瀬穂祐子	眞壁三澤清川永水奥井野正春定信教雄自康直喜幸治	安田清水在原光広知道彌	眞壁栗林三幣遠藤新川美香織直代美子二岩原浩正繁		後半	